

それにしても、私は、この出版で何をしようとしたのであろうか。自らいうのもおかし
いが、エネルギーは確かにあった。そして、こういう本は世界ではじめてだと考えた。そ
の時、これは、乱という軸をはずしてもやらねばならぬと考えた。それ以後、私は軸をは
ずすことばかり考えたのかもしれない。とにかく1987年、すなわち今年の2月20日か
ら、私は「走り出していた」己れ自身の発意からではなく、逮捕されるという奇妙な関係
において私の血は燃え上り、「その、何かに向かって走りはじめた」のである。その間、獄
中において、裁判パフォーマンスを計画するに到って、そして、また、実際にそのパフォー
マンスを演ずるにいたって逮捕されたものと、逮捕したもの、との間を急激ないきおいで
ストン運動がはじまった。或る時は、あたかも女と母親の間を子として駆けめぐっている
錯覚におちいり、事実、母親は奇しくも、この4月、死んでしまった。象徴的絵を描いて
すでに長いが、その人物の、或は動物の大方が99パーセントまでが、母親であり女性で
あり娘であり姉であり妹であり、現在は愛する女性たちであり、それは、いつしか天使の
女性へと変貌していった。この長きにいたる「女性」を描くという事実は、いったい何で
あるのだろう。それは何のことか幼い娘には判らないまま、腹がふくれ、そり上ってくる
現象に似て、この本への出発は事の重大さに気づかぬまま妊娠という現実を知る前の稚い
少女のふくらむ不安のお腹にも似て、いないこともない。本人が妊娠して、いまやふくら
みはじめたというのに、自覚もないまま、せつせと友人達をかき集め、集積されたものが
膨大となりその膨大さに印刷編集出版の東先生が驚いて、いまや教養ある少女の母親、父
親に似て、その極限にまでふくれあがった少女の腹を見て嬉れしいやら世間体が悪く恥ず
かしいやら限度を越えた能力を要求されつづけ、いささかノイローゼ気味になっているの
が判らぬではない。判れば病状治療のため縮少、中止と、所詮、世間の常識に適う形に削
ぎ落されてゆく運命にあるのだ。そのことはよく判っている。いまでは本末転倒して、こ
の無謀なる本の頁数にすべての象徴は集約され、私の千の瞳はそのページを日夜めぐって
いる。もはや内容ではない。ましてや意味でもない、しゃれた言い方が許されるならば、
いまやページをめくる手の思想へと転化され変化され革命的指の運動と化したのである。
なんというデレタントであろうか。究極的にはタイハイという現象しか生めないなのか
もしれない。思えば私の絵も最初は母親であり愛する女性であり、娘であり姉であったり
妹であって壮嚴な思考と方法論があるかに見えるが大作の、そのテクニクが佳境にはい
るや、すべてを投げうって唯ひたすら細い線を引く乗人と変貌してしまうのだ。毎日、毎
朝、ただひたすら線をひいている自分自身を、ただ発見するはかりである。しょせん、こ
の膨大なページという物質的な望外な願いと努力は結局のところ指の、絵を描く単純なる
運動がもたらした産物なのか、別言すれば2月20日に逮捕され、牢獄の中で考えたこと
が、この肉体の一部、指の運動に還元されることによって凹凸を感じた警官と囚人の間が
埋められたということの意味するものであろうか、だとすれば、ページを繰る指の運動は国
家と個人の、あるいは国境と越境の、或いは先進国と後進国の、または白人と黒人の、黄
色人種の間があきすぎた、そのスキマを埋めるマテリオなのか。そして、指自身には、妊

娠した幼い少女のごとく、いまだに世間いっばんでいう“事の重大さ”は、からっきし判っていないのである。さて、最初から私は「ことの重大」を知る知恵はない、いわゆる軽率であり、その軽率さを愛しているのである。最初から無縁なのである。それにもかかわらず、向こうから事の重大さはやってくる。私は苦悶しながら、かくあれかしと走り回り、結局は事の重大さは理解できずに指の運動と化さしめているのであろうか、そして人は言うだろう。指にも権力があり思想があるのだと。私には反論する勇気も、また知恵の持ち合せもないことは事実である。ここまで書いて判ってきたことは、確かこの本が何らかの形で出版されるまで私は序文なる文章を書きつづけるのではないかという気がする。それは何故なのだろうか。それは、やはり裁判パフォーマンスを企画した結果、ひとたび走り出した列車は作られた時間表どおり国々の停車場を駆け抜けていく為のみ走りつづけているのであろうか。私は無意識ながら、その習慣化された列車の運行を阻止しようとなせる先生の“無為”を持ち出したのだろう。言葉の上では本の実現はいつでもよくなっている。無性にページへの願望が集約され、一見も二見も、それは病的症状を呈しているのである。さて、にもかかわらず、3,000 ページという膨大な本を実現させた方がいいのか、現実、そして現在どうワメいてみても、逃亡を企てる印刷屋、出版屋、編集者をひつつかまえて迫るのは、この私自身なのである。その、この私自身にとって実現しない内にだけ内蔵されている幻想、願望はもし実現するとすれば、いやでも縮少という形と粗雑という運命はさけ難い。結局は出版を中止する勇気がなかった見本となることは、私自身判っている。折角ここまで走ってきたのだから、本人自身、相当満足しているのであろうから今更、東先生を追い詰めて出版しなくてもという気は十分、私自身の中にもあります。しかし、20 何年、いや 30 年近い私と東先生との友情と云ったら悪いが、その間に横たわっているエネルギー、勿論、東先生にとっては突然の交通事故みたいなもので、ナニガナンだか判らない状態なのに、無理やり私からセツつかれ、なにがなにだか判らないまま、仕事をしているというのが現状であろう。私がこう書いている最中に、すでに避難してはまだ膨大な本のページを繰っているのは、ただ私の指だけで終るのかも知れない。ここまで書いてきて、9月14日からはじまる画廊春秋の個展で、一番当初は同時に出版記念会をやるつもりで依頼文にもそう書いていた。帰国してすぐ膨大なページ数の方に私が傾き、結局は個展（地元福岡）も10月に延期、とにかく10月19日までに出版できるように祈ってはいるのだが、何度も何度もこうして書いているとおり、現在にいたるも実現性はとぼしいのである。いま、いや今日は1987年9月9日で、床面積356㎡、壁面147㎡とあるABC画廊ほか2カ所の展覧もすみ福岡へ一応帰り、東先生と逢うことにしている。今日9日は午後4時から後かたずで、おわり次第に新幹線で帰福である。今夜、この原稿を東先生に渡して土曜日、夕方11日には受けとり東京へ出発する筈だ。さて、1987年9月9日、ここはホテル福美大阪市西成区荻之茶屋1-2-11とある。1,700円の部屋で文章を書いている朝の6時前だろう、何故なら、まだテレビが放映されていないからだ。これは、本の序文であります。着々と出版の方へ走りつづけています。どうぞ御期待下さい。現在

のところ 1987 年 10 月はじめにては出版を実現させたいと願っています。いまや、わが友、東の雅理上る大重事談先生ひとりが頼りとなってしまった。

1987 年 9 月 9 日、朝、カマガ崎と呼ばれるホテルにて、桜井孝身。